

3436 霧走る湖水：状況と心模様②

眼前の自然の舞台。ドライアイスのように白くはない。微妙な色彩。

その現象の面白さ。霧が走るように見えた。実に素早い。

かすかに風を肌を感じる。一定方向の風ばかりではない。風が回っているような感じ。

その風に反応して、水面の霧がはうように、まるで走っているようにも見えた。

この動きは、ワンショットの作品には表現が難しい。

私は連写しない。眼という最高のレンズを使って、呼吸をはかる。

肝心なのは、心と感性、何も考えない。集中するだけである。

私の感性が求める瞬間と光景がスマイルオンミーしてくれる瞬間の真剣勝負。

対象の的は、まだ漠然としており、次に的を狙うも、まだ不確定。

弓道と違って、的は静止していない。

読みもあるだろう。直感もあるだろう。運もあるだろう。

ある瞬間、突然に、的を絞る時がくる。

座禅でいう数息感、自分になつた呼吸を静かに、深く、なめらかに、

武道では、その動作の流れにしたがって呼吸が大切と言われる。舞の世界も、吸う息、吐く息によって動作をきりつめ、心の動きを抑え、水の流れるようにできるとある。

瞬きを撮るといふ写真道は、武道にも舞にも通じる。

言葉は簡単だが、簡単なものほど難しい。知っている事と出来るという事は違う。

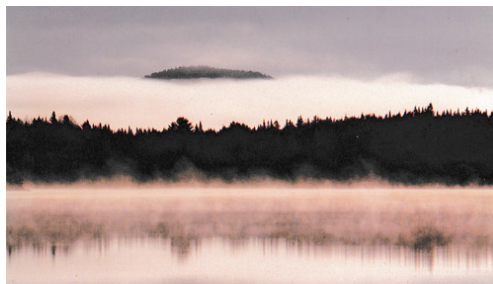
弓道では、足根が大切と、踏まえている足の裏から根が生える。

軸の大切さ、写真道でも、わきを閉め、安定した構えが必要。主役、脇役、借景、構成、
光と影、色彩を感覚で瞬時に。間合いをとる、被写体との距離感もあるだろう。
瞬時に感覚で受け止めるには、先入観や固定概念は邪魔。

本来なら、理性や理屈、知識や思考力が働くことをできるだけ避けたいとの思い。
肝心なのは、何も考えないこと。自然現象は、予測ができないことが多い。
その変化のスピードも、かなり速い。

集中して、自分の目と感性、そして、フットワークよく動けるか。
相手、被写体が主役。最高の状況を撮りたい。
それには謙虚さも必要。この「夢の時間」が面白く楽しい。

やがて、風が、ピタッとやんだ。湖面の風もほんの少し、落ち着いた瞬間になった。
鮮明に、鏡のごとく写ると面白くない。なんともぼやけた、ファジーなところが、私の感性。
長い勝負に決着がついた。たかがワンショット、されど…



上記は、写真のコピー。

絵画のようにデフォルメできないから面白い。一期一会にかける。
瞬きは、過去現在未来の凝縮された瞬間。
純楮寒漉き和紙に染摺ること^{こうぞ}で一層、趣のある作品になった。
夢絵作品（2 m×1 m）。モチーフであるこの素材が残った。タイトルは「霧走る湖水」